

- 1 派遣期日 令和5年9月23日(土)
- 2 派遣先 成城学園初等学校
東京都世田谷区祖師谷 3-52-38
<https://www.seijogakuen.ed.jp/shoto/>
- 3 研修内容
公開授業・研究協議・講師と授業者によるシンポジウム

テーマ 「社会科と子どもに向き合う会」
シンポジウム 「社会科の学習を通して、育成していく児童像について」

(1) 公開授業①

- 第4学年 教科名 社会科 指導者 宮田 諭志 先生
- 学習内容 単元名 わたしたちのくらしから出るごみと向き合う
～できることとできないこと、働く人の姿から社会のしくみへ～
- 本時の展開

- ① 学習課題をつかむ

 - ・前時までに学習した、ごみ収集作業員のAさんとKさんの働きについて気づいたことを共有し、本時の課題を確認した。

AさんとKさんの仕事はどこまで？

② AさんとKさんの作業について挙げたことから、二人の仕事について考える。

 - ・自分たちで調べたことや映像を基に、ごみ収集作業員の仕事はどのようなものなのか意見を交流して考えていった。

③ AさんとKさんが、本来の仕事よりも多くの作業をしなくてはならないのはなぜかを考える。

 - ・ごみ収集作業員の仕事の中から出てきた疑問について、意見を交流していき、自分たちやごみを出す側にもできることはないか更に考えを深めていく。

④ AさんとKさんの仕事はどこまでなのかについて考えてみて気付いたことを学習感想に書く。

 - ・友達の発言を基に、学習を通して気付いたことを学習感想に書かせた。

- ①前時までに学習した内容や児童の発言をリスト化したものを掲示していた。このことにより、今までに学習した内容や発言を振り返りながら、児童が学習に取り組めることができていた。
- ②板書に児童の発言を書く際には、児童の名前も書くことで、発表できた喜びを感じさせるとともに、似たような発言や関連づけられる発言をその場でまとめていた。そのことにより教師主導ではなく、児童の発言で授業が成り立っていた。
- ③課題の提示の仕方を工夫することで、単元の内容だけでなく、更に自分たちの生活も振り返っていきながら学習することができていた。
- ④タブレットで気になったことをその場で調べられるようにしておくことで、児童がその場で気になったことを調べ、それを全体に共有できるようにしていた。このことにより、授業がより活発に行われていた。

公開授業②

- 第6学年 教科名 社会科 指導者 秋山 貴俊 先生
- 学習内容 単元名 武士の世の中

○本時の展開

- ① 教科書にある図を掲示し、武士の館にはどのような人が住んでいるかを考えさせていた。
 - ・予想を発表する際には、図の中から根拠を示しながら発表するように促していた。
- ② 図の中の、莊園を警備している一団に焦点をあて、これらの人は何をしているのかを考えさせていた。
 - ・児童の発言から更に「なぜ？」や「何を持っている？」など、切り返しを多くし、より児童たちの考えを広げていた。
- ③ 図の中の、何かを懇願している人に焦点を当て、この人はどのようなことを言っているのかを考えさせていた。

武士が困っている人を助けてあげる時代ってどんな時代だったのだろうか？

- ④ 武士が困っている人を助けてあげる時代とは、どのような時代なのかを考えさせていた。
- ⑤ 本時の学習をまとめる。
 - ・友達の発言を基に、学習を通して気付いたことを学習感想に書かせた。

- ①児童が自由に問いに対して発言できるオープンクエスチョンを取り入れることで、児童の多様な考えを基に授業を展開する場面が見られた。
- ②予想を発表させる際に、根拠を明確にさせていくことで、児童たちの考えを共有しやすくしていた。
- ③児童の発言から更に「なぜ？」や「何を持っている？」など、切り返しを多くし、より児童たちの考えを広げていくことでより深く考える時間をとっていた、そのことにより自然と児童たちの中で、考えを交流し合う場面が多く見られた。

(2) 研究協議

研究協議では、「社会科と子どもに向き合う」を大きなテーマとして、2つの授業についての協議を行っていった。その中でも多くのグループで話題になったのは、児童が主体となって社会科の学習に取り組んでいたことである。社会科の授業では、どうしても教科書に載っている内容を一方的に伝達するような授業になってしまいがちである。しかし、今回の2つの授業では、児童たちが自分事として捉え、社会生活に向き合いながら学習に取り組んでいたということが協議の中で出た。そのためには、児童が自分事として捉ええながら、学習に取り組んでいけるように発問や課題を工夫していく必要があるという意見もあった。

(3) 講師と授業者によるシンポジウム

講師と授業者によるシンポジウムでは、授業者の反省から始まり、授業者に対する質問や講師である小林宏己先生から、様々な社会の『なぜ』を発見し、意欲的に追究する力を育てるための深い学びに迫るための授業についての話があった。その中で、社会生活についての認識を高めていくためにも教科書だけでなく、様々な資料や実体験の中から結び付けて考えていきながら学習に取り組む児童を育てていくことが大切だと分かった。そのために問いや掲示物の工夫が必要であることも分かった。

(4) 感想

- ①授業では、教科書に載っている内容を一方的に伝達してしまいがちな授業になることがあるが、児童一人一人の意見を大切にしていきながら、児童同士の意見を繋ぎ合わせていく授業であった。この学習の雰囲気の中で、児童は自信をもって自分の考えを表現することができていた。
- ②研究協議では、児童たちが自分事として捉え、社会生活に向き合いながら学習に取り組んでいくために、問いの工夫であったり、児童にとって身近なものを題材にしていたりすることが大切であることを各先生方と共通理解をすることができた。
- ③講師と授業者によるシンポジウムでは、様々な社会の『なぜ』を発見し、意欲的に追究する力を育てるための深い学びに迫る授業には、教科書だけでなく、様々な資料や実体験の中から結び付けて考えて学習に取り組むことが大切だと分かった。